復興編

破壞は易く建設は難い。吾々は此の困難な建設に、第一此を踏み出した時、全村を擧げて、裸一貫の原始時代に立返つた氣持になて、足を地上にシツカと付けて、全精神を打ち込み、新しい、內的にも外的にも充實した新世界の實現を理想として、寧日なく勇奮努力した結果、凡ては着々として効を奏して、一週年を迎へた九月一日には、已に九分の美しい實を結んだ。

然し吾々の理想は、單なる復興を以て滿足するのではない。より以上に充實した、健實な大中井村の建設にあるのだ。此の理想の實現は、果して三年の後、五年の後、十年の後に完成し得るものか、其の道程にある吾々自身にさへも解らない一の謎である。だが、吾々は、吾々の持つて居る凡ての『力』と『頭』とを以て、其の時間の短縮に日も是れ足らない有樣である。

過去一年有餘ケ月の間に、吾々の爲し得た成績は、是を他村の夫れに比して、一頭地を拔いて居る事を信じて疑はない。然し、懈怠は死である。是の勢と氣力とを持て、更に躍進しつゝある。一の大ゴルーを目指して。

一、行政の復興と村の綱領　震災當時は、前村長城所源助氏は辭職せられ、後任村長は未だ見當らず、專ら小清水助役が、一切の事務を處理せられてゐたが、復興の大事業を目前に控へて、村の主腦を缺く事、一日遲るれば一日の損失あるを痛感して、各方面の人格、手腕共に村長として恥しからぬ人を求めた結果、遂に小沼吉治氏を得た。氏は新しく村長の椅子を占め、同時に吏員中、最も事務に通曉した高橋氏を女房役たる助役に立て、陣容を一新して、建設の大事業に向つた。

倒れた事務所は是を復舊して、役場の事務を、舊事務所に於て開始したのは、九月十五日で、爾來震災後、急に激增した事務を處理する爲め、專ら事務能率の增進を計り、吏員を督して、日曜も祭日も、殆ど休みなく、活動を續けた。其れが爲めに、山と積る事務にも、一日として後日に延引した事も無く、復興の事業を進捗して來た。

又一方に於ては、震災前から、皇室中心主義を信條に、共存共榮を計り、自治觀念の陶冶、勤儉力行を村是として、擧げて此の實行に務めて來たが、村長は更に一歩を進めて、大異變の際の深刻な經驗と、復興事業の大困題とに想到して、新に村の綱領を作つて、是の綱領の下に、進んで來た。

夫の綱領とは次の五ヶ條である。

一、立國ノ大義ヲ闡明シ、皇室中心主義ヲ信條トシ、以テ健全ナル國家觀

である。

念ヲ養成スルコト

二、自治ノ觀念ヲ陶冶シ、公共心ノ涵養、犧牲的精神ノ旺盛ヲ計ルコト

三、村民相諧和シ、被此共濟ノ實ヲ擧グルコト、

四、勤儉力行ノ風ヲ作興シ、國富ノ增進ヲ計リ、建實ナル生活ノ立脚點ヲ求メ、以テ報公ノ誠ヲ致スコト

五、教育ヲ勸奬シ有爲ノ人材ヲ養成シ、知識ヲ世界ニ求メ、以テ大國民タルノ實ヲ擧グルコト

是れは復興の第一歩に擧つた、村民の精神を發露したものであつた。是れに依て、百年の計は定まり、中井村の向上、發展の基礎は成つた。

二、教育機關ノ復興

イ、中村尋常高等小學校　震災の爲め、新校舍を失つたので、止むなく二部教授制を布いて教授して來たが、磯崎校長は、鋭意教育の刷新を計り、教授法に意を注ぎ、他面體力の養成に務めて、一日の懈怠がなかつた。部下の諸先生も亦、校長の意のある處を察し、協力一致して教育に當られつゝある爲め、二部教授制でも、決して他に勝るとも劣る點はない。

校舍復舊も、爾來、城所源助氏が村長の蔭に熱心な奔走の結果、舊校庭に更に田三百九十坪、山林百五十坪、畑六十坪を買收し、六百坪の大擴張を行ひ、低資七萬九千圓を借り受け、四萬四千四百圓を投じて東向に總二階立延建坪四百八十坪（建坪二百四十坪）の新校舍の增築に着手し、大正十四年四月二十日には落成の豫定である。尤も附屬品、附屬家屋等の新築は、現に其の設計を急いで居るから、完成の曉には、村に一偉觀を添へるに異ひない。

ロ、井口尋常小學校　井口尋常小學校も中村小學と同じ樣に、新校舍倒潰の爲め、餘義なく二部教授を行つて居るが、復興の意氣物凄く、露木校長を始め、各職員は、日夜懸命な努力を計つてゐるので、生徒の成績も至つて良く、職員と生徒とが、父子の樣に勉强して居る樣は、氣持が良い。

學校は井ノ口各字の家より、土臺石として、各戸五貫目以上の石一個宛を出し、別に破壞された石垣には、村民何れも夫役に出でゝ、鋭意其の完成を期して來た。又、一方約三百坪の校庭を擴張し、一萬二千二百九十圓を投じて、平家建百七十坪の新校舍を增築する事になつた。是れは大正十四年三月二十日に完成の豫定で、新學期からは、新しい木の香の元に、一層進だ教育を施し、有爲な人材を作ろうと、職員の意氣は躍つて居る。

ハ、境分校場　境分教場は、境、境別所方面の人々が、教育に熱心な爲め、村の青壯年が夫役に出て、井戸を修覆し、校舍も起して震災後一ヶ月を經た十月一日には、已に完全に復興し、高橋氏を

主任に、熱心な教育を施してゐる。

二、中村實業補習學校　補習學校は十二月一日以來、舊に復して、何等の支障も無く、生徒も先生も熱心に學で居る、現在在學生は百四十三人を算して、擔任教師は、磯崎校長を始め、十人である。

三、各字ノ復興

今日、何處の字に行つても、あの大震があつたかと怪まれる程、どの部落も復興した。蓋し是れは、各區長、伍長などが、其の字の人々と、協力一致して、專ら戊申詔書の御趣旨に基き、勤儉力行して、產業の振興を計ると共に、精神作興の詔書の御趣旨を體して、風俗を匡勵し、浮華放縱とを斥け、貯蓄を盛にした結果であつて、現在の世帶數八百三十八戸中、尙ほバラックに居住して居る者は、曉の星よりも尠い。其の何れもが、今春來の豐作に、百尺竿頭一歩を進めて、被害地所の復興に努め、失はれた寶の挽回に日も足りない有樣である。

四、產業ノ復興

震災の爲め、耕地の一部を失つた關係上、作付反別は幾分減少して、大麥は大正十一年度に比較して二十町歩、小麥は四十一町歩、水稻四町六反の減少を見たが、作付以來、天候好順であつた爲めと、農產物相場の好調子な爲めに、實收入に於ては大差を見ない。

又、震災後、蔬菜類の栽培が激增して、字に因て組合を作り、直接京濱の市場に搬出して、多大の利益を得てゐる。是れは逐年增加の傾向を示し、已に來春期の計畫に沒頭してゐる。

飜つて、商工方面を見るに、大破せられた水車、醬油釀造業等は、何れも急速な復活振を示して、機械の響が高く上つてゐる。唯だ、全國に亘る大不景氣風の影響を受けたのと、銀行の未開業の爲め、資金の融通圓滑を缺いて、現狀の維持を計つてゐるに過ぎないが、是れとても、景氣の一度好轉した曉には、一大飛躍の出來る準備は萬端整つて居る。

五、復興後ノ金融

現在に於て、最も復興に遲れて居るものは金融界である。殊に大磯銀行は、閉鎖一年餘に亘つて、非常な影響を與へたが、最近駿河銀行が是れを買收したので、本年中に二割、大正十四年十一月三十日迄に三割、殘額は債權の回收に應じての支拂といふ條件の元に承諾書を各預金者に配布して其の調印を求め、開業を急いで居る關係上、近く何等か具體案となつて現はれるに異ひ無い。其の節は、現在の金融逼迫も緩和され、村民も一息吐く事が出來やうか。

信用組合に於ては、中井村報德信用組合の分は、現在積立金四千五百圓、貸付金五萬七千圓を示し、着々震災の被害を回復して居るので、早晩、再び華々しい活動に入る事と信じて居る。

大正十四年二月七日印刷
大正十四年二月十日發行

編輯人　松本愛敬
發行者　中井村役場
T 12.5.25 ～ T 15.7.7 (村長)
右代表者　小沼吉治
東京市牛込區早稲田鶴巻町三〇八
印刷人　石原勘一郎
神奈川縣足柄上郡中井村
發行所　中井村役場